

|         |  |
|---------|--|
| 氏名      | タキザワ ジュン<br>瀧澤 純                         |
| 学位の種類   | 博士（心理学）                                  |
| 学位記番号   | 人博 第 118 号                               |
| 学位授与の日付 | 平成 30 年 3 月 20 日                         |
| 課程・論文の別 | 学位規則第 4 条第 2 項該当                         |
| 学位論文題名  | 受け手に合わせたメッセージ作成と心の理論の使用                  |
| 論文審査委員  | 主査 教授 山下 利之<br>委員 教授 沼崎 誠<br>委員 教授 平井 洋子 |

### 【論文の内容の要旨】

本論文は、主として心理学と言語学の立場から、詳しくいえば、認知科学、認知心理学、社会心理学、社会言語学の立場から研究を行った。そして、コミュニケーションの中でも、言葉の産出と理解の問題に焦点をあてた。さらに、コンピューターを介したコミュニケーションとも呼ばれる CMC (computer mediated communication) に注目して、受け手に合わせてメッセージを変化させて作成する行動を対象に研究を行った。

本論文は、第 1 部、第 2 部、全体的考察及び結論に分かれている。第 1 部では、受け手に合わせたメッセージ作成の行動面について研究を行った。そして、CMC の中でも、感情や意図などの伝達を助ける役割をもつ顔文字に着目した。第 2 部では、メッセージ作成という行動の背景に存在する、送り手が受けて手の心を推測するという認知プロセスに焦点をあてた。そして、全体的考察及び結論では全ての研究を統括した。なお、第 1 部と第 2 部における全ての実験で共通するのは、参加者がメッセージの受け手の心を推測しているという点である。

研究における第一の目的は、CMC における受け手に合わせたメッセージ作成について明らかにすることであった。第 1 部の第 1 章では、顔文字、絵文字、句読記号を扱った研究を概観することにより、送り手の行動について検討している研究、句読記号を扱った研究、往復や複数回往復するような時間の単位を扱った研究が不足していることを指摘した。一方、相手との以前のやり取りについての影響を明らかにした受け手デザインと聴衆デザインの研究においては、CMC 場面がほとんど扱われていないことを指摘した。これらの指摘に基づき、第 2 章から第 5 章までは顔文字を扱った受け手デザインについての研究を行った。第 2 章（実験 1）では、顔文字と句読記号を添付する際に、精緻に区別が行われていることを明らかにした。第 3 章（実験 2）では、顔文字はあいまいで多義的であることを確認した。第 4 章（実験 3）では、受け手デザインに及ぼす相手との関係性の影響を検討したが、受け手デ

デザインへの影響は見いだせなかった。ただし、本音を伝える場合に比べて、嘘を隠す場合に受けてデザインが働きにくくなることが明らかになった。第5章（実験4）では、受け手デザインに及ぼす処理資源の影響を検討した。特に皮肉を伝える場面において、処理資源が不十分になると受け手デザインが働きにくくなることが明らかになった。以上から、CMCにおいても受け手に合わせたメッセージ作成が行われており、それらは処理資源などの影響を受けることが示された。

研究における第二の目的は、受け手に合わせてメッセージを作成するという行動に含まれる、心の推測についての認知プロセスを明らかにすることであった。第2部の第6章では、心の推測についての研究を概観した。そして、心の推測を行う際に特権情報をと共有情報の利用という視点からの実証的な研究の必要性を指摘した。そして、第7章（実験5）から第9章（実験7）までは、初期の心の推測を調整するとき、相手も知っている共有情報を使用し、共有情報のみに基づいて再び推測を行うのではなく、特権情報を使用し、初期の推測から特権情報の影響を割り引くように抑制するという可能性を示した。加えて、第8章（実験6）では相手との親密さが低い場合には抑制のプロセスが働きにくいこと、第9章（実験7）では処理資源が不十分な場合には抑制のプロセスが働きにくいことを示した。第10章（実験8）では用いた処理資源の実験操作について、記憶による影響である説明可能性を排除した。以上から、心の推測において、初期の推測から特権情報の影響を割り引くように抑制するプロセスが働いていることが示された。

これらの研究から、CMC 場面で実証されていなかったいくつかの点を実証した。第一に、受け手デザインの存在である。メールや SNS のような文字を利用した CMC 場面においても、顔文字や句読記号を他者に合わせて使用していることがわかった。第二に「嘘をついていることを隠す」という想定だけで行動が変化する現象が第3章（実験2）と第4章（実験3）でみられた。嘘の研究で指摘されていることが、CMC 場面でも確認できたことになる。第三に送り手にメッセージ作成をさせた上で、そのメッセージが最適であるかどうかを受け手が評価する課題を使用し、そのような場面での受け手デザインがみられることを確認した。第四に、心の推測における自己中心性がメールのやり取りをする本研究のような場面でもみられた。表情や体の動きなどが伝わりにくい場面において、自己の知識を利用するかのような推測が行われていた。

さらに、これまでの受け手デザインや聴衆デザインのような相手に合わせたメッセージの作成には、相手の受け取り方を推測する認知プロセスが前提となっていると考えた。

本研究の第2部で行った実験は、自己中心性の研究と大きく関連する。従来の研究では、自己中心性は初期の情報の整理が不十分な状態での推測と、その後の情報の整理を行った状態での推測という見方であった。そのため、共有情報と特権情報がどのように利用され、抑制されているのかがわかっていなかった。しかし第2部の研究から、その情報の整理プロセスは、特権情報を使用し、初期の推測から特権情報の影響を割り引くように抑制すると考えられる。この点が第2部における最大の独自性であろう。これらについて、近年の定説とな

りつつある二重過程理論 (e. g. Kahneman, 2011) から議論した。